画教授細目（工藤晨作成）、同図画教授表目（同）、埼玉県女子師範学校図画教授細目（同）、群馬県前橋中学校図画教授細目（川村孝作成）、新潟県小千谷中学校図画教授法（渡辺忠三郎作成）、夏季講習会予定案（同）等、既に上梓されたものの抜粋である。なお、右の教授法、教授細目は明治三十九年八月一日から五日まで本校で開かれた図画教育会主催第一回図画教育者大会における報告と考えられる。

④ 在外研究者、赴任者の増加

明治三十七年五月二日より同年十月二十九日まで米国セントルイスで万国博覧会が開かれた。日露戦争のさなかであったが渡航者が相次ぎ、本校からも少なからず渡航した。この博覧会の前後の時期には本校関係者のなかで博覧会見物、留学、赴任など種々の目的を持って海外に赴く者が著しく増加しているが、左記はその概況（三十六～三十八年）である。

桜岡三四郎（助教授）鋳金術研究のため三年間仏、米両国留学を命ぜられ、明治三十六年二月二十四日出発。三月二十四日ニューヨーク着。バーミンガム、シンシナチ等にも滞在し、三十八年十月七日、ニューヨークを出発。ベルギーを経てパリに至る。三十九年四月パリを発ちイタリアを巡歴。ロンドンを経て同年八月四日帰国。

下村観山（教授）明治三十六年二月二十日、ロンドンへ向けて出発。欧州各国を経て三十八年十二月十一日帰国。詳細は187頁。

海野美盛（教授）明治三十六年四月十八日、パリ出張を命ぜられて出発。セントルイス万国博も視察して三十七年八月八日帰国。出張の目的は正木直彦の指示により、フランスで縮彫機によるメダル製造法を研究し、縮彫機を購入することであった（吉田千鶴子著「東京美術学校依嘱製作資料」『東京芸術大学美術学部紀要』第十三号。昭和五十三年）。

沼田一雅（明治三十六年二月、助教授を辞職）農商務省海外実業練習生として陶磁器象形術を研究するため海野美盛と同船出航。同年六月から十月までパリのアカデミー・ジュリアンに通学し、十月よりセーブル陶磁器製造所に入所。三十九年六月三十日に帰国し、雇として復職。詳細は225頁。

筧定次（彫金科卒業生）海野美盛らと同船出航。三十八年六月現在パリ在住。同年十月農商務省海外実業練習生となり、合金金属製造色付法、金属装飾及び印刻術研究のため四十一年三月現在同地に滞在。

前島交吉（彫刻科卒業生）海野美盛らと同船出航。四十年三月農商務省海外実業練習生となり、鋳金術研究のため四十一年四月現在フランス滞在。

武石弘三郎（同）明治三十四年四月出発。ブリュッセル美術学校で彫刻を学び、同四十二年八月帰国。武石については佐々木嘉明

著『彫塑家・武石弘三郎ノート』（昭和六十年。北日本美術）がある。

小川三知（絵画科卒業生）明治三十三年七月渡米。シカゴ美術院（Chicago Art Institute で洋画、図案を三年間学ぶ。三十七年セントルイス万国博に際し日本政府の工芸館の仕事に従事し、同年一月農商務省実業練習生となる。三十八年桜岡三四郎、白山谷喜太郎の仲介でシンシナティーのアーティスティック・グラス・ペインティング会社に就業し、その後デイトン美術ガラス工場、コロンバス市フォン・ゲレヒテン美術ガラス会社、ピッツバーグ板ガラス会社、ニューヨークのマウント・バーナンの小会社、ゴーハム会社その他に勤務しステインドグラスの研究を続け、四十四年帰国し製作に従事。わが国のステインドグラスの草分けの一人である。

岡部覚弥（元助教授）明治三十六年渡米。ボストン市立美術学校で彫型を学び、ボストン美術館技師となり、また、メトロポリタン美術館日本部主任となり、四十一年三月岡倉覚三、六角紫水らとともにヨーロッパ、モスクワ、奉天、北京を経て帰国。

山本正三郎（彫金科卒業生）明治三十五年八月金属美術研究のためニューヨークに渡航し、「カールデンボルグ」氏工場、ゴーハム銀器製作会社、プロビデンスのレデラー会社等に入社。同三十七年四月より四十年四月まで農商務省海外実業練習生となる。同四十一年ロードアイランド州立図案学校夜間部に学ぶ。同四十年プロビデンス市に日本富士会社を設立。同四十一年六月帰国し東京府立工芸学校教諭となる（「東京美術学校旧職員履歴書」による）。

山下英夫（鍛金科卒業生）明治三十六年秋渡米。三十七年十二月より伊藤龍吉と同じくティファニー会社コロナ分工場鍛金部に就職し、また、ゴーハム銀器製作会社に移る。

伊藤龍吉（鋳金科卒業生）明治三十六年八月「ヴワンブリッグル」製陶会社の招聘により渡米。三十七年八月セントルイスを経てニューヨークに至り、ティファニー美術金工会社、次いでロードアイランド州のゴーハム銀器製作会社に入社。三十九年ボストン市「チキリング」写真館で写真術を研究。四十三年同市に写真館開業。四十五年からニューヨークで写真業を営み、大正十年四月帰国（「東京美術学校旧職員履歴書」）。

柳敬助（西洋画科中退生）明治三十六年冬、本校二年生のとき退学して渡米し、ニューヨークのアート・スチューデント・リーグ、ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン、ニューヨーク・アート・スクール等で学び、渡仏してアカデミー・コラロッシュに学び、同四十二年帰国。『美術新報』第九巻第二号（明治四十二年十二月一日）にその帰朝談が掲載されており、留学中の生活や戸張孤雁、荻原守衛、白瀧幾之助、出口清三郎、高村

光太郎、和田三造、沢田誠一郎、不二（藤雅三）、横山大観、菱田春草の消息なども窺うことができる。

岡倉天心（元校長）明治三十七年二月十日出航。三月よりボストン美術館で同館所蔵の日本絵画の目録作成作業に従事（以後毎年半年は米国に滞在）。九月二十四日セントルイス万国博の芸術・科学会議で“Modern Problem in Painting”（「絵画に於ける近代の問題」）の講演を行う。十一月“The Awakening of Japan”（『日本の覚醒』）出版。翌三十八年三月二十六日サンフランシスコ経由で帰国。

横山大観（元助教授）岡倉天心と同船出航。四月、ニューヨークで同行の菱田春草、六角紫水とともに絵画漆画展を開催し、農商務省海外実業練習生となり、七月、農商務省に「美術工芸品の図案」と題する報告書を提出。九月、セントルイス万国博を見物し、十一月、ボストンで作品展（大観、春草、観山、紫水）を開催。三十八年一月、ニューヨークで、また、三月から四月にかけてワシントンで春草と作品展を開き、四月二十九日、ロンドン着。同地で春草と作品展を開き、ドイツ、フランス、イタリア等を旅行して八月十日帰国。

菱田春草（元嘱託）大観の旅程と同一。

六角紫水（元助教授）農商務省海外実業練習生となり、岡倉天心らと同船出航。三十七年五月よりボストン美術館東洋部の物品整理を委託される。同年十月十二日、農商務省よりセントルイス万国博における調査旅費を支給される。四十一年二月、ニューヨークのメトロポリタン美術館所蔵の日本品の整理に従事。四月二十九日、ロンドンへ向けて出発。農商務省の命令でドイツにおける漆器業の状況および本邦製品販路の実況調査を行い、ロシア、清国を経て同年七月十一日帰国。

岡崎雪声（元教授）セントルイス万国博見物のため明治三十七年四月八日出発。

河辺正夫　ニューヨークの画室にて（河辺晴好氏提供）

河辺正夫（助教授。明治三十七年三月休職し退官）明治三十七年二月二十二日農商務省海外実業練習生となり、同年三月二十日渡米。ニューヨークをはじめ各地の会社につとめながら室内装飾を学んだ。アール・ヌーヴォーポスター画家として著名なアルフォンス・ミ

ュッシャとも交流があった。写真はニューヨークの河辺のスタジオ。左が河辺である。同郷（岡山）の国吉康雄は明治四十三年にこの河辺のもとに寄食し、ナショナル・アカデミーへ通った。河辺はヨーロッパにも旅行し、同四十五年帰国。

白浜徵（教授）図画教育研究のため国費留学。明治三十七年三月十八日出発。同三十八年八月までボストンに滞在。以後ロンドン、パリ、ドイツに滞在し、同四十年三月二十一日帰国。詳細は273頁。

大村西崖（教授）明治三十七年五月二十日臨時博覧会事務局よりセントルイス万国博出品審査（工業工芸部）に関する事務を嘱託され出発。同年十月セントルイスを発ち、シンシナチ、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨークを経て十一月ロンドン着。大英博物館、サウスケンシントン美術館を中心に東洋古美術を見学。既出伝記草稿（83頁）には

秋米國を發し、大西洋を渡つて英・法・德・以諸國を巡遊す。豫て稿する所の希臘羅馬諸神傳等を携えて、諸聚珍館の藏する所の古代神像及び印度佛教圖像の歐洲に在るものを歴覽し、對照して討究に資し、乙巳（卅六年）の春歸朝す。

とある。西崖にはこれが初めての欧米旅行であった。三十八年十二月一日付ロンドンよりの書簡（『東京美術学校校友会月報』第三巻第四号）には

ブリチシュ聚珍館の印度古彫塑品及埃及アシリヤ希臘羅馬の遺物には、腰を脱かし申し候、毎日同館に入りびたりて頸をひねると涎を垂るゝとが商賈のやうに有之、傍ら古本屋をあさりて嚢底を叩き、借金の出來たる代りには大分積年の欝憤を晴らし申し候、

と、その感動が認められている。三十八年三月五日帰国。

岩村透（教授）西崖と同様の職務（美術部審査）を帯びて西崖と同船出航。セントルイス万国博では美術教育部の大会に二度出席（『東京美術学校校友会月報』第二巻第十号所載書簡）。三十七年十一月ロンドン着。ブリュッセル、アンヴェルス、ハーグ、アムステルダム、ベルリン等を経て三十八年三月二十七日帰国。サウスケンシントン美術館所蔵古代メダルの模造品六十六個を本校に齎した（同前月報第三巻第八号）。

本保義太郎（彫刻科卒業生）セントルイス万国博東京出品協会および富山県より商工調査等を嘱託され、大村西崖らと同船出航。ニューヨークではロダンの弟子のボーグラムのスタジオで学び、夜間はコロンビア大学附属師範学校で絵画を学んだ。三十八年二月、農商務省海外実業練習生となり、同年十月、ニューヨークを発ち、ベルギーを経てパリに至り、十一月パリの国立美術学校に入学。四十年四月ロダンを訪問。十月十八日パリで死去。本保については片折正明著「彫刻家本保義太郎」（高岡市立美術館・博物館誌『高志の華』第三十六、四十二）がある。

白瀧幾之助（西洋画科卒業生）大村西崖らと同船出航。セントルイス万国博を見物し、その後パリ、ロンドンで油画の勉強をして明治四十四年帰国。

高木誠一郎（同）大村西崖らと同船出航。『高木背水伝』（直木友次良編。昭和十六年。大肥前社）にはこの渡米について詳しく記されている。「往きの旅費さへつくればあとは向うで働けばいゝ、それには先づアメリカへ行かう。アメリカで働いて、金が出来たら欧洲に渡らう」と、僅かの小遣いを持って出発したが、西崖らと違って三等船客となった背水と白瀧は、「想像もつかぬほどの虐待」を受けた。バンクーバー到着後、彼は本保と二人でセントルイスへ行き、ここで本保と別れ、ＹＭＣＡの紹介で部屋を借り、職捜しに奔走。漸く万国博の日本売店の夜警となり、幾らかの貯金ができたが、それを全部盗まれ、借金してコロンビア大学の美術科に入学。ハウス・ワーク、扇子や日本茶、種々のカードの販売、標本描き、玉突などをしながら通学した。しかし、無理がたたって体をこわし、やむなくヨーロッパ行きを断念し、肖像画や壁画を描き旅費を稼いで明治三十九年四月六日に帰国した。

正木直彦（校長）大村、岩村と同様の職務（教育部審査）を帯びて明治三十七年八月十二日出発（『回顧七十年』に岩村と共に出発とあるのは誤り）。セントルイスに滞在し、同年十一月十四日帰国。

沢田誠一郎（宗山。図案科生徒）京都市の留学生として正木直彦と同船出航。セントルイス万国博を見物し、農商務省海外実業練習生となり、ニューヨークで図案を勉強して四十一年春帰国。

福地復一（元教授）大村西崖と同様の職務（工業工芸部審査）を帯びて明治三十七年渡米。

真島中太郎（西洋画科生徒）セントルイス万国博見物のため明治三十七年五月二十日出発。

海野銀三郎（彫金科卒業生）シカゴのケーラー女史の招きで明治三十七年五月二十日渡米。同三十八年六月現在シカゴ在住。

江良剛治（鋳金科卒業生）明治三十七年六月七日、鋳金術および鋳金作品販路調査のため渡米しサンフランシスコに滞在。同三十九年五月現在パサディナに滞在。

新免教太郎（同）明治三十七～三十九年現在在米。

矢崎千代治（西洋画科卒業生）同右

戸田謙二（同）同右

出口清三郎（同）明治三十八年六月十一日ニューヨークへ向けて出

発。農商務省海外実業練習生となり、同三十九年四月英国を経てパリ着。

原陽一（日本画科卒業生）明治三十八年ボストンに滞在。同三十九年四月帰国。

藤島武二（助教授）四年間の仏、伊留学を命ぜられて明治三十八年十一月十八日出発。四十三年一月二十六日帰国。詳細は317頁。

辻村延太郎（松華。教授。明治三十八年十一月休職。大正六年嘱託として復帰。）仏国ガイヤールの招聘で藤島武二とともに出発。四十年一月帰国。詳細は321頁。

早崎梗吉（絵画科卒業生）明治二十六年岡倉覚三の中国美術調査旅行に同行し、三十二年九月再渡支して以来日支を往復。三十七年六月現在陝西省三原宏道大学堂で「邦語」「国画」「応用化学」「体操」を教授。三十七～三十八年現在西安武備大学堂に在職。三十九年七月帰国。

石河寿衛彦（漆工科卒業生）明治三十三年仏領安南ハノイ職業学校漆工教師として赴任。同三十八～四十年現在同校に在職。

石川巳七雄（浩洋。鋳金科卒業生）明治三十三年仏領東京（トンキン）職業学校鋳造教師として赴任後昭和十一年まで在職。在職中については「仏印滞在四十年」（『新亜細亜』第二巻第五号。昭和十五年五月）の回想記がある。

勝田良雄（蕉琴。日本画科卒業生）明治三十八年九月農商務省海外実業練習生としてインドへ向け出発。河口慧海その他の斡旋で当地の美術学校で日本画を教え、同四十四年帰国。

松長長三郎（図案科卒業生）明治三十六年十一月十九日天津市官立商品陳列所工芸部員として出発。三十八～三十九年現在清国直隷高等工芸学堂に在職。

高橋勇（烏谷。元嘱託）明治三十七～三十九年現在清国北京大学に在職。

森岡柳蔵（西洋画科卒業生）明治三十八年十一月清国北京大学堂に赴任のため渡支。

毛利教定（絵画科卒業生）明治三十八年九月農商務省実業練習生（図案研究）として渡支。四十一年現在上海に滞在。

『東京美術学校校友会月報』にはセントルイス万国博前後の渡航者たちの書簡や帰国者たちの投書が数多く掲載されており、現地の状況を知る資料が得られる。その中の明治三十八年三月十九日正木直彦宛本保義太郎書簡（同誌第三巻第七号）には「在米の本校出身者

は殆んと二十餘名に達し」云々と記されており、渡米熱の高まりをよく示している。セントルイス万国博会場では本校関係者たちがよく顔を合わせたらしく、その際のさまざまなエピソードが同誌第三巻第四号にまとめて掲載されている。二、三抜粋してみると、

▼遠國に在て先生や友人に逢つた程嬉しいものは無いね、今年は聖路易博覽會場へ大分集合したが、日本庭園の吉野庵と云ふ丼飯屋で繩暖簾的に腰を掛け、鱈腹やらかして紫宸殿と云ふ政府館の外椽にヅラリと並んで駄法螺を吹いた愉快さは何とも云へぬ、顔揃の面々は先つ本保〔義太郎〕、眞島〔中太郎〕、高木〔誠一郎〕、伊藤〔龍吉〕、澤田〔誠一郎〕、柳〔敬助〕、櫻岡〔三四郎〕、白濱〔徵〕さん等で、たまには岩村〔透〕、大村〔西崖〕、〔正木直彦〕校長さんなどもお仲間入りであつた。（面白かつた生）

▼大觀、春草、紫水の三大家がニューヨーク到着の翌晩散歩を試みた、十一時頃道だけは先づ間違へずに歸ツて來たが、入口の錠前がいくら鍵を入れても開きそうがない、オイ菱田早く開けろよ、奈うしても開かないよ横山君、然うか？ アッ大變だッ、隣りの家だッた番號が違ふ、早く逃げろ！ アッハッハ……。（見たかッた生）▼三大家が展覽會を爲るので絹を張る枠が入用だから、或る大工に注文したところが、巾一尺五寸丈四尺許りのもの大小共入みの一箇拾圓づゞ取られた、後で山下〔英夫か〕君に紹介して注文したら二圓づゞで上等のものが出來た、それから紫水君に蒔繪の材料の錫粉を頼まれたから買ッて見ると、金剛砂の使用したのであッた、此夏セントルイ〔ママ〕で逢ッたらすッかり灰壳〔ハイカラ〕に成て笑ッた僕が笑はれた。（蠻カラ生）

などという記事があり、ほかには言葉が通じないための苦労話や金縁眼鏡をピカリと光らせて無類の通人で通っている天香福地復一の滑稽な失敗、酔漢をやっつけた宗山沢田誠一郎や海野銀三郎の快挙等々のエピソードが記されている。また、同様の意味で興味深いものに同誌第二巻第十号所載白浜徵書簡がある。全文を左に転載しておく。

一　セントルイスには、大分學校の連中見えられ居りし由、先方より來翰ありしを抜書して、左に、

岩村〔透〕氏の來書中に、

過日教育大會の開設有之、其方の美術教育部の大會には、二度出席いたし、種々有益の談話を耳に致候。美術館中、法郎〔フランス〕西、獨逸など、中々有益の出品致し居り候。殊に最も宜敷は合衆國の部分にて、善くも斯く集めたりと思はれる迄に蒐集致候。小生はセントルイスの郊外八哩のカークゥードと申處に閑居致居、日々電車にて博覽會へ參り居り候。

大村〔西崖〕氏よりの書中に、

當地着爾來不相變編纂物起草引受從事罷在候。博覽會は唯其の規模の尨大に驚き、騷擾と不行屆と何事も金ヅクメなるとに呆れ申候。當地の用事相濟候へば、御地へも必ず參り可申と存居り候。

櫻岡〔三四郎〕氏よりの書中に、

小生は四月より南方アラバマ州に於て、五十六尺の大像鑄造に聯係して、ニューヨークを去り、續て當博覽會に參り居り候。無限の望みを以て來りし、大博覽會も差程にあらず、世界は先づコンナ物かの感じも仕候　此度各國の特有物を點檢して、佛は日本に及ばず、且つドーシテも獨逸が第一番といふことを看破仕候、將來警戒すべきは獨逸と存候。

横山〔大観〕君などの一行ニューヨークに着せし時、大分周旋の勞を執りしが、何れも日本服にて大道濶歩といふ始末、山の如きの人には毎度閉口仕候。

一　當地の美術館に日本品の多きことは、歐米中有名なることにて、繪畫のみにても、四千點以上に有之、其他の美術品實に目を驚かす許りに候。岡倉〔天心〕氏は其目錄編製のため日々同館へ出勤せられ居り候。又六角〔紫水〕氏も同館の雇となり、美術品（重に蒔繪類）の修繕に取掛かり居り候。

一　横山〔大観〕氏はニューヨークにて展覽會を開き、好結果なりし由にて、來る十一月頃當地にて開會せんとて、目下當地に滯留揮毫中の由に候。

一　米國人の美術品を作り、又之を愛するの眼識は、如何なる程度のものなるかは、未だ存じ不申候へども、兎に角實業の發達に於ては驚くの外なく隨て美術を之に應用せんとして、百方苦心し居る樣感伏に不堪候。

一　假令身は海外にあるも、故國を思ふの情は等しく在留の本邦人集まれば、すぐに戰爭の心配談に御坐候。日々の新聞にも戰爭に關する記事は勿論、挿畫を加へ、大に日本に同情を表し居り候。

一　當地は支那人至て多く、辨髮を去りて洋服着用のものもあり、往々支那人と間違へらるゝとて、憤慨したる日本人もありしが、小生は未だ一度も支那人と間違へられたることは無い代り、佛人や伊太利人と間違へらるゝに至りては沙汰の限りに候。

一　小生も博覽會見物致度存候へども、今少し涼しく相成候上と考居候、當地は噂に聞きしよりは至て凌ぎよく御坐候。

八月十一日　　白濱　徵

11 yarmouth st,
Boston, Mass, U.S.A.

なお、上記の渡航者の紹介に明らかなように、当時は少数の文部省留学生や国費出張者は別として、十分な旅費も持たずに渡航した人も少なくなかった。在外研究者にとって助けになったのは農商務省海外実業練習生の制度で、上出のほか、例えば明治三十九年に渡欧する高村光太郎なども、父が出してくれた二千円から旅費を引く

と幾らも残らなかったので、アメリカで働きながら勉強してヨーロッパに渡り、実業練習生（毎月六十円ほど支給）となってかろうじて勉強が続けられたという（「回想二」『美術』第二巻第二号。昭和二十年三月）。しかし、練習生の数にも限りがあり、選に漏れた人々のなかには苛酷な生活を送った者もあった。高木背水については既に記したが、江良剛治の書簡（『東京美術学校校友会月報』第三巻第二号所載）にも三等船客となって泥棒扱いされたりしながらアメリカに渡り、飲食を節約して職捜しをするさまが記されている。彼らはアメリカで資金を稼いでヨーロッパへ渡る心算だったが、背水のように体をこわして中途で帰国したり、本保義太郎のようにパリで病死してしまった例もあり、目的を達せなかった人々もあったのである。

第五節　明治三十八年

明治三十八年東京美術學校年報

甲　款

概況

明治三十八年四月一日ヨリ同月七日マテ一週間本校校舎ノ一部ヲ本校校友會ニ貸付シテ恤兵展覧會ヲ開キタリ

同年七月十一日午前九時ヨリ第十四回卒業証書授與式ヲ行ヒ卒業製作及生徒成績品ヲ陳列シテ来賓ノ観覧ニ供シ同月十二日及十三日ノ両日本校関係者ニ縦覧ヲ許ス

従来本校入學者中俊秀ヲ抜擢スル目的ヲ以テ四月ヨリ六月マテ中學校卒業生ニ仮入學ヲ許シタルガ前年度中此規程ヲ廃シタルヲ以テ本年ヨリ改正規則ニ依リ中學校卒業生ヲシテ始メテ豫備科ニ入學ヲ許シタリ　其在學期間ハ仮入學ト同シク四月ヨリ六月ニ至ルノ一學期間ニシテ最後ニ試驗ヲ施シ本科入學ヲ許否ス

規程

本年度内ニ於テハ規則内規等ノ創定改正シタルモノナシ

設備

本校敷地ノ狹隘ナルハ毎年本項ニ於テ述ブル所ノ如ク又其校舎ハ明治十年教育博物館トシテ建造シタルモノヲ充用シ居ルガ故ニ逐年破損腐朽ノ箇所ヲ増シ漸次危殆ニ赴キ改築ノ必要ハ倍々焦眉ノ急ニ迫ルヲ以テ數年前ヨリ之ヲ本項ニ於テ申報シ一面ニ於テハ改